

共創まちづくりの「仮説」提案

森栗 茂一 (大阪大学 CO デザインセンター, morikuri@cscd.osaka-u.ac.jp)

A hypothesis propose for ethnographical machidukuri & Co-creational dialogue

Shigekazu Morikuri (Center for the study of CO*Design, Osaka University)

要約

本論は、民俗学から対話型まちづくりに研究変遷した筆者の20年余の経験を内省し、その方法を遡及推論し、民俗学的まちづくりの方法を「仮説」提示することを目的とする。都市民俗学、阪神大震災復興まちづくり、住民協働型交通まちづくり、大阪市こどもの居場所づくりでは、住民の活動に共感し(同情)、生活の在り方を考え直し、生活価値の発見を求めてきたことが、自己再認識された。近年では、命や公共に対する配慮が、民俗学的まちづくりには重要と考えている。その結果以下の仮説を提示する。民俗学的まちづくりの方法は、個々の思いや生活の内省や、集団、地域の反省を共有化するものであり、共感や生き方についての問い、地域の歴史、命や公共心を対話のなかで発見する。その結果、地域の暮らし方、aspirationを発見し、より了解性の高い「仮説」を提示するものである。本論では、このような民俗学的まちづくりを「仮説」し、これを共創 co-creation まちづくりとよぶことにする。

キーワード

内省, 仮説, 民俗学, 現象学, 発見

1. はじめに

1.1 本論の目的

筆者の専門は都市民俗学であった(森栗, 2003)。1995年の阪神淡路大震災以降、震災復興のコミュニティづくり、協働型地域交通づくり、子どもの居場所づくりなど、多様なまちづくり活動に関わってきた。こうした活動は「器用」「熱意」「迫力」と好評されることもあれば、「エセ専門家」「なんでも専門家」「方法がない」「軽い」と批判されることも少なくなかった。いずれにせよ、属人的に評価、または批判されてきた。

しかし、自己の軌跡をふりかえって、この20年余を俯瞰してみれば、属人的な評価ではなく、民俗学を専攻していたからこそ発見できた方法であると気づいた。

本論は、民俗学から対話型まちづくりに研究変遷した筆者の研究経験を内省し、その方法を遡及推論し、民俗学的まちづくりの方法を「仮説」提示することを目的とする。

1.2 本論の方法

本論では個別から仮説検証し一般性をみちびく帰納法をとらない。また、一般定理から個別をみて定理を吟味する演繹法をもとらない。本論ではいわゆる仮説検証によって一般化(正当化)する方法を前提としない。臨床心理学など人間科学、まちづくりなどの複合的な対象を扱うとき、個別から変化する個別を内省的に遡及推論(アブダクション)し、より了解性の高い発見をし、これを「仮説」(仮説と表現することもある)として仮に「設ける」。本論は、こうした現象学的方法による「仮説」提出を目的とする。

この場合の「仮説」は帰納法の仮説ではなく、仮説演

繹法で置いた仮説でもない。菅野は科学実証の仮説とは異なる論理学として「仮設」と表記する。「仮設」は遡及推論のなかから求めるものであるとした(菅野, 2015, p.108)。ポパーは帰納法や演繹法の仮説はどこまで吟味しても絶対正当化できないとし、逆に反証可能性があることが「仮説」の価値を高めると主張した。本論では以下、引用も含めて仮説演繹法でも帰納法でもないこのような仮説(仮設)を、通常の仮設とは区別して「仮説」と表現する。

したがって、研究分析と生活体験とを分離する客観性を重視する通常の科学論とは異なり、当事者による生活感覚からの観察経験の分析、当事者経験を活かした他の当事者への想像、類推が方法である。民俗学ではこの方法を「同情」とよんでいる。

1.3 対話、物語の位置づけ

倉阪秀史は、住民参加はなぜ必要かという議論に対して、公共世界に奉仕する「私民」でない個人が、①ステークホルダーとして参加し、②公共的意識を涵養するためと述べている(倉阪, 2012, pp.27-29)。ハーバーマスも「公共的討論は意思を理性に転嫁させる」(船橋・壽福, 2013, p.97)から必要だと述べている。これは、まちづくりの理念=民主主義論である。

サンドラ・M・ナトリーらは、研究による形式知と生活経験による暗黙知とは、個別に存在するのではなく、実践コミュニティのなかで結びついている(ナトリー他, 2015, pp.223-224)。まちづくりの対話とは形式知と生活知(暗黙知、民俗と同意と定義する)とのコミュニケーションとしての側面もある。

形式知は数字やモデルとして示されるが、生活知はエピソード、物語として示される。川端祐一郎は物語を「出来事を、意味に満ちたやり方で結びつける明確な時系列を持ち、一定の聴き手に対して、世界の存在や人々の経験

についての洞察を提示するような言説」と定義する(川端・藤井, 2014)。本論では川端の指摘を参考に、物語を時間経験知(歴史)も含めた総合的な生活知、公共政策、まちづくりなど公共に関する仮説を示したものと定義する。

本論では、まちづくりという総合的な政策における対話、そこから共有化された物語は、単に民主主義であるとか、形式知と生活知の融合というだけではなく、まちづくりの仮説提示であると考え、第3章に4つの経験的物語を示して分析する。

1.4 これまでの民俗学的まちづくり方法に対する「仮説」

日本における民俗学は、文化事象の分析に終始してきたが、近年、公共民俗学の議論もある(菅, 2012)。とはいえ、民俗学の実践は公教育・博物館を越えることは稀であり、その声は土木計画学、実践政策学には届いていない。こうしたなか、筆者は、土木計画学や実践政策学のなかで、対話型まちづくりにおける民俗学的方法を提示してきた。

「忘れられた衆議」(森栗・板倉, 2015)では、宮本常一が紹介した対馬の寄り合いを分析し、集う、わかちあう、聞きあうといった、腑に落ちるような言葉や話の筋、情感、対話者との「したい」コミュニケーション、対話者に対する「とうとい」と尊敬する視線、および柳田國男の提示した「内省」と「同情」を抽出した。そうした民俗学的方法から、単なるまちづくり会議とは異なる、より日本社会に適したまちづくり対話が必要であると指摘した。日本の寄り合い衆議における「腑に落ちる(ふりかえってみれば〔俯瞰〕確かにそうだ)」という納得的合意(ハイデッガーのいう存在了解(木田他, 1994, pp.299-300)と類似すると筆者は考える)は、データによる(専門家の)自己正当化、説得的コミュニケーションとは異なる意味があることを指摘した。

「オールドニュータウンの持続を担保するくるくるバス活動の位置づけについて」(森栗, 2016)では、神戸市住吉台の阪神淡路大震災以降の地域交通まちづくりと2005年のくるくるバス開通、およびそれ以後のまちづくり活動を、山崎亮のコミュニティデザイン(対話の場の設計、対話の関係性)と、鷺田清一のコミュニケーションデザインで評価した。コミュニケーションデザインは、鷺田清一が現象学研究から提唱した「問う」「聞く」「待つ」による対話法である。

「実践政策学のためのエピソード記述の方法序論」(森栗, 2017)では、

- デカルト実証主義の主客一致は一致の認識が客観存在それ自身と参照することができず確証できない。カントはこれを誰も突き崩せない難問とした(竹田編, 2015, pp.6-7)。
- 客観的認識は、限定条件で思い描かれたものだから、後続する体験によって書き換えられる可能性をつねに持つ(西, 2015, pp.128-130)。

の二点を指摘し、客観的科学主義の課題を明示し、間主観における類の共通構造を取り出し、体験反省的記述で了解性(存在了解)を高める現象学的方法を提示した。具体的には、エピソード記述に「発見」「納得、力動感」「内省」「社会一般性」「切り分け記述」「ありあり感」「公共性」が必要であることを「仮説」し、石牟礼道子「天の魚」の事例を評価検証した。力動感ある民俗、ありあり感のある生活のきりわけ記述、まさに民俗誌・生活誌記述による内省から「仮説」提示する「まちづくりエピソードの記述方法」を提案した。

次章では、内省による「仮説」提示について、遡及推論 *abductio/retroduction* の可能性を検討する。

2. 遡及推論

2.1 論理学と仮説

J.S. ミルは「帰納法は『経験からの一般化』 *generalization from experience* によって自然の因果法則を探求する『実験的探査の方法』と定義した(米盛, 2007, p.145)。しかし、帰納法は仮説を置いて実施しなければ一致も差異発見もできない。その要素を引き出すことさえできない(米盛, 2007, pp.146-153)。帰納法で厳密に事実を並べても、事実の範囲でしか仮説を提案できず、創造的「仮説」は難しい(米盛, 2007, p.130)。

そもそも事実を集めること自体が一定の予見であり、アプリオリに社会のすべてを並べることは不可能である。帰納法の「事実をして語らしめよ」は、事実が自ら語るのではなく、いわば研究者が事実語らしめるのである(米盛, 2007, p.160)。帰納法はアブダクションによって提案された「仮説」をテストし正当化する拡張的推論のひとつの方法であるが(米盛, 2007, pp.181-182)、十分な「仮説」推論がないままの機能法の適用は、科学とはいえない。

仮説演繹法でも演繹論理の前に仮説をたてるが、実際には論理的な仮説をたてるのは難しい(米盛, 2007, p.130)。

2.2 機能的飛躍とナラティブによる「仮説」的飛躍

米盛裕二は「現代の論理学は論理のデジタル化によって大きな発展を遂げたが、論理学者たちの関心はもっぱら論理のデジタル化にのみ向けられてきたために、論理学はますます現実の人間の思考の論理から離れてしまった」(米盛, 2007, p.iv)と批判し、より厳密性を求められる人工知能論の研究者たちはむしろ「厳密でない推論」に人間の推論の特質を見い出そうとしている(米盛, 2007, p.v)と、論理のデジタル化ではなく「厳密でない推論」に本質論を期している。

「厳密でない推論」であるアブダクションは、帰納法とは異なる発見法的論理学 (*heuristic logic*) である(米盛, 2007, p.8)。アブダクションは、遡及推論 *retroduction* ともよばれ、厳密ではないが結果から(「仮説」を)推論する(米盛, 2007, p.43)ものである。

そもそも「仮説」提示には一定の飛躍が入る。米盛は機能的飛躍以外に、創造的な「仮説」的飛躍(アブダク

表 1 : 2 つの仮説飛躍

機能的飛躍 inductive leap	正当化の文脈	説明する
「仮説」的飛躍 abductive leap	発見の文脈	理解する

ション)があることを説く(米盛, 2007, p.92・110)。ポパーも方法論には正当化の文脈と発見の文脈があるという(ポパー, 1980)。これは説明と理解に対応している(ウリクト, 1984, p.6)。以上、正当化の文脈の機能的飛躍と、発見の文脈の「仮説」的飛躍を、表 1 に整理した。

創造的な「仮説」的飛躍(アブダクション)のためには、観察、経験に対して洞察力と想像力をもって(米盛, 2007, p.58)、驚くべき事実を発見し、問いをたて意識的に熟慮して行われる推論により(米盛, 2007, p.61)「仮説」をたてる必要がある(米盛, 2007, pp.53-54)。

アブダクションは直接観察したもの(弱い推論)とは違う種類の何者かを推論することや、より高次の「仮説」を提案し発見の見通しを立てる拡張的推論であり観察から洞察し創造する飛躍である。この飛躍は観察不可能な何ものかを仮定することに展開する(米盛, 2007, p.87)。

現象学的分析(経験の質を問う)は経験を反省(民俗学的には内省)することによってなされる(貫, 2003, p.227)。アブダクションは試行錯誤的かつ自己修正的であり(米盛, 2007, p.65-68)、常に内省をとまなう(米盛, 2007, p.124)。

提出された「仮説」には、「もっともらしさ」「検証可能性(偽の場合反証可能なもの)」「単純性」「経済性(費用・時間なく検証できる)」が求められる(米盛, 2007, pp.71-72)が、「仮説」的飛躍による「仮説」は、内省による誠実な自己修正以外に十分な検証の方法がない。

しかし、「仮説」提示による科学の発見は、事実の組立による帰納法よりも重要だ。発見は科学経験からの推論のプロセスでなされる。事実の組み立てだけで惑星楕円軌道を検証するには、経済性(費用・時間)がかかりすぎる。ケプラーの惑星楕円軌道の発見は、ケプラーの個人経験の結果から推論したものであり、遡及推論である(米盛, 2007, p.43)。ニュートンは「私は仮説をつくらぬ」と言うが、引力のように観察不可能な対象に関する仮説なしに、万有引力の法則は発見できない。ニュートンは機能的仮説、仮説演繹法はとらななかったが、現象学的には「「仮説」的方法」を用いねば発見はできない(米盛, 2007, pp.164-165)。

2.3 EBM と NBM

機能的飛躍と創造的な「仮説」的飛躍はどちらも重要な仮説法であり、現場ではどちらも必要である。以下、「NBM (Narrative-based Medicine) —物語と対話による医療」(医療教育情報センター, 2004)に基づき、臨床医療での議論から機能的飛躍と「仮説」的飛躍の使われ方を検証する。

近年、医療は EBM (Evidence-based Medicine : 根拠に基づいた医療) が重視されている。最新の臨床研究に基づいて統計学的に有効性が証明された治療を選択すること

により、より効果的な質の高い医療を提供することをめざす。実際、EBM の考え方(機能的[精密な]飛躍)に基づき、疾患ごとに診断や治療について作成された診療指針(ガイドライン)は有効であることが実証(正当化)された。しかし医療サービスの現場は「エヴィデンス」が確立されていないからといって止めることはできない。

米国の内科学会に掲載された論文のメタアナリシスの結果からは、実証されたエヴィデンスの耐用年数は5年前後であるとの見積もりが出ている。EBM の枠内に入っていない医療は、EBM とは異なる現実をもっており、それ固有の科学的プログラムとして設定可能でなければならない。エヴィデンスは科学性の保証の裏返しとして、その一時性、反証可能性、訂正可能性にさらされている。そしてこのこと自体は、科学が健全であることの指標であり、そこに問題はない。むしろその忘却が医療への盲信や権威化に展開しがちであることが問題となる(Meta Paradigm Dynamics Specialblog. <http://meta-paradigm-dynamics.net/web/?p=351>)。

しかし Evidence Based 「最善の根拠」と「医療者の経験(資源)」、「患者の価値観」とを統合するようなものの必要性を指摘する声もある(中山, 2008, p.154)。一方で、Narrative Based Medicine も等しく重んじられるべきであるという声もある(Greenhalgh et al., 2001)。こうした観点から、医療従事者 - 患者関係における「意味のある物語」の共有および構築は、EBM 至上主義と並行的に、「NBM / 物語と対話による医療 (Narrative Based Medicine)」として注目され始めている。これは、科学的な問診による「仮説」的飛躍、すなわち原因の発見である。

「NBM (Narrative-based Medicine) —物語と対話による医療」(医療教育情報センター, 2004)によれば、EBM の有効率は 60 ~ 90 % とされる。逆にいえば EBM が有効でない患者が 40 ~ 10 % 存在する。さらには根拠になるデータが十分そろっていない疾患、治療が困難な疾患、高齢者のケア、死に至る病気、あるいは精神に関わる病気など EBM を適用できない場合もある。こうしたなか EBM を実践してきた英国の開業医から提唱されたのが NBM である。

たとえば、いろいろな診療科をたらいまわしにされて病気を特定できない患者は、NBM の必要な 10 ~ 40 % である。千葉大学附属病院には NBA の必要な 10 ~ 40 % の患者のために総合診療科が設置された。千葉大学附属病院の生坂正臣教授は「問診ですべての病気の 80 % がわかる」と言い切る。生坂は、原因不明で受診した患者の痛くなった場所を全部問う。食生活、体重変化、不眠、子供との接触、それでも類推できねば「全身が痛くなる」という患者に対して「では痛くならない部位はどこか」を問う。そうすると患者が「顔と頭、手のひらは痛くならない」と告白する。さらに「どんな時痛くなった?」「料理」「どんな料理?」「炒める」と医学的類推をしながら発祥の状況を対話していく。「料理以外で全身が痛くなることは?」と問う。すると「階段を駆け上がったとき」との答えを得る。こうして通常の問診の数倍以上の時間

をかけて医学経験にもとづく問いをたて、症状のバックグラウンドまでの物語を詳細に理解し、生坂は体温上昇なのに汗をかかない皮膚症の可能性を「仮説」した（テレビ朝日「たけしの健康エンターテイメント みんなの家庭の医学」（2018年1月23日放送）より）。

機器による計測数値のみをエヴィデンスとする場合、問診を簡単に終え、すぐに血液検査し、結果「不明」とし、推測に基づき「精神安定剤」を与える。異なる病院では簡単に問診を終えればMRIをかけ、それでわからなければ繊維筋痛症を疑い、痛み止めを処方する。結果は効果なしである。患者は整形外科、皮膚科とたらいまわしにされる。

現状の医療は血液検査やMRIの数値のエヴィデンスに頼るわりには、医師のたてる推量に根拠がない。血液検査やMRIの数値に頼る「非論理科学的思いつき」で診療しているため、10～40%の人々に対処できない。NBMは患者のナラティブを医学的知識に基づいて問い観察し、問診・観察から「仮説」を類推する。NBMは、EBMとの補完関係にある重要な医療である。

日野原重明は「医学というのは、知識とバイオテクノロジーを、固有の価値観を持った患者一人ひとりに如何に適切に適応するかということである。ピアノのタッチにも似た繊細なタッチが求められる。知と技をいかに患者にタッチするかという適応の技と態度がアートである。その意味で医師には人間性とか感性が求められる」と、EBMとNBMのバランスを説いている（医療教育情報センター、2004）。

2.4 生活経験・時間経験と遡及推論

探求は科学のみならず生活にも及ぶ。デューイは、「日常的経験と生活の場、常識環境の相互作用の状況」を常識的探求 *comon sence inquiry* とよんでいる。生活探究を示唆した重要な指摘であるが、「常識」という言葉は誤解をまねく。フッサールは生活世界 *life-world* への関心を「生の哲学」とよんだ（『現象学事典』1994, pp.259-262）。科学的探究が知識そのものを目的にするのに対して、生活探究は使用と享受のために生ずる（米盛、2007, p.237）。生活探究は質的である（米盛、2007, p.241）。これをデューイは直接知 *acquaintance knowledge*、実践知 *practical knowledge*、質的知 *qualitative thought* と表現している（米盛、2007, p.242）。筆者はこれらを生活知、民俗の類義と考える。

科学的真理も「意味の一類」にすぎない。意味は真理より貴重であり、その範囲も真理よりいっそう広い。フッサールによる意味とは、意識の作用である意味思考の相関項であり・・・対象的なものの直観によって充実される。・・・意味の探求は志向的体験の分析を通して深められる（木田他『現象学事典』、1994, pp.29-31）ものである。

そして、哲学は真理よりも意味に関わる。科学的真理が結果の検証可能性を本質とするのに対して、生活知は直接的現実的応用に関して決定される意味である（米盛、2007, pp.246-247）。フッサールは1925年講義された『現象学的心理学』に「すべての思想や精神的活動から生じ

るその他すべての理想的形成体の最終的基盤は経験世界（生活世界 *life-world*）の中に存在する」と言いきっている（『現象学事典』、1994, p.259）。生活経験を対象とする民俗のなかに理想的形成体の最終的基盤がある。

これに対して歴史学では集団や社会に対する時間的な遡及推論により、*hi-story* が仮説提案される。ときに、宗教のエピソード記述や、芸能の語り物（浪花節など）に仮託される。*hi-story* はタイムマシンでもない限り、確認できず、歴史は歴史学者によって「仮説」提案され、または宗教的物語・口承文芸によって「仮説」提案され、その解釈による仮説提案そのもの自体が意味を持つ。

自分の経験を意味づけるには (*sense-making*) / 社会的背景・政治的背景・経済的背景について、もはや自明となってしまうものを問い直すことが重要だ。そのためには「過去を想い、現在を分析する *retrospective reflection*」ことや、「現在を手がかりに、未来を想うこと *prospective reflection*」などの、時間を越えた奥行きのある内省が求められる。加えて *critical reflection* (批判的内省) は、大衆化による物語の暴走を警戒する（中原・金井、2009）。

一方、まちづくりの合意形成は、社会集団の遡及推論によるコミュニケーション「仮説」とも考えられる。社会は実験できず一回きりであるから、まちづくりは、優秀な人が単純な仮説をもって実行しても、後から検証してみると後悔ばかりが残る。結局、とりかえしがつかず、「まちづくりに正解はない」とうそぶくか、結果責任を回避するしか方法はない。だから、まちづくりでは、あらかじめより多くの人の生活知を結集し、かつ時間を越えた奥行きのある内省をもとに、まちで生きる意味を合意形成し、より了解性の高い「仮説」をつくり、皆で共有してあの手この手で社会実験してみるしか方法がない。プロセス共有すれば、共同反省（反省と内省は同義。ここでは共同なので反省とした）ができるから、その共同反省を踏まえ、次により高次の「仮説」を建設することができる。まちづくりとは生活知の重ね合わせによる「仮説」、異なる時間（過去、現在）の物語を推量した「仮説」、そして、それらをあわせた「仮説」実験の連続的試行（ティンカリング）である。

3. 民俗学的まちづくりアプローチの内省的検証

3.1 内省的エピソードに対する分析要素

本章では4つ体験エピソードを紹介する。このエピソードを、「実践政策学のためのエピソード記述の方法序論」（森栗、2017）の「第3章 接面という方法」で提案したフッサールの接面による構造の取り出し方法（西、2015, p.138）に基づくエピソード記述の要素で分析する。同論では、客観主義パラダイムをとらない（西、2015, プロローグ p.v）。体験反省的エヴィデンス = 接面パラダイムは、「自由」「不安」「言語」「欲望」「感情」「身体」といった人間一般の価値に到達する記述要素ならば、了解性が高くなるとした（山竹、2015, p.101）。また臨床心理学の社会支援の接面パラダイムでは、「命」「持続」「愛着」「生活」などが、二次的エヴィデンスとして有効とされている。

そのうえで、同論文では

- 発見、気づき（眼から鱗）の記述（言語化）
- 対象の力動感が伝わるメタ認知（納得、腑に落ちる）
- 反省（内省＝自分の体験、感覚と対象者との対話を自分にひきもどして考え、それを記述する）
- 社会的一般性（「命」「持続」「リスク」「生活」など社会一般に関わる公共的な反省とする）
- 背景、考察、エピソードに切り分けて記述する
- ありあり感（当事者性を背負った表現や方言）構造発見、分析方法、記述法

という記述要素がエヴィデンスになりうるものとして提案され、水俣病に関する聞き書き物語が検証されている。

本論では「実践政策学のためのエピソード記述の方法序論」（森栗，2017）で示した、エヴィデンスになりうる記述要素に加えて、内省的・民俗学的分析要素（内省、歴史・記憶、同情、故郷（森栗，1993））、その結果として対象のなかにわきおこる aspiration（志）、現象学的分析要素（構造（貫，2003）、問い）を個々の物語記述（エピソード）から抽出し「⇒」以降に記し、これまでの研究経験を内省し、了解可能性の高い要素を取り出す。

3.2 都市民俗学経験を内省する

近代化した日本が向都離村のなかで独自文化を失いつつある昭和初期、多様な郷土研究が柳田國男によって統合され民俗学が成立した。戦後、民俗学は農村を基本とする常民が担っている基層文化研究として、大学のアカデミズムの一部に位置を得た。しかし、高度経済成長を終えた 80 年代、都市や消費社会の課題を無視できなくなり、多様な都市民俗学が提唱された。都市民俗学は基層文化ではなく、変化をとらえようとした模索であったが、都市民俗学が民俗学の方法に寄与したかは判然としない（小池，2015）。日本民俗学会では都市民俗学の評価も内省もないまま、都市民俗学が忘れられ、個別研究がすすんでいる。

筆者は都市民俗学が議論された最末期に『都市人の発見』（森栗他，1993）を編著した。『都市人の発見』には、「都市の村人」考、香港社会における慈善のかたち、現代のイエと祖先、「伝統」の創造と再生産、都市言語の形成と受容をめぐって、「民俗学」および「都市」の発見を収めた。人の感性によって都市と故郷を論じた。筆者は自己のイエを対象にした都市家族の経験を自己分析している。ここでの民俗学の方法は、内省であり、故郷論であった。

3.3 阪神大震災復興まちづくり経験を内省する

1995 年の阪神大震災では、筆者は被災地を歩き回り、各地で自己および被災者の体験を重ね合わせ、自己の故郷としての神戸市長田区への愛着を発見し（「ルネッサンスのために 長田人の発見」『神戸新聞』1995/4/18）、災害のなかから見えた都市の幸福について、下町のささえあいの生活、高齢者やこどもの命から記述している（森

栗，1998; 2004）。下町の長屋家は狭いが、調理や応接、子育て・介護を、市場や喫茶店、お好み焼き屋、風呂屋、路地などに点在させている。機能を共有して暮らしており、筆者はこれを記述しコレクティブタウンとよんだ。同時期、共有リビングを持つ、コレクティブハウジングの建設が延藤安広を中心に検討され、筆者はそれに参加した（神戸市住宅局コレクティブハウジング委員会）。

1999 年、筆者は『神戸新聞』夕刊一面に復興まちづくりのトピックを簡潔にまとめた「随想」を書く機会を得た。うち「随想：長屋の復興」（森栗，1999a）「随想：河原の市場の再建」（森栗，1999b）を素材として内省する。

震災以後、長田のまちづくりの現場で、様々な市民と出会った。先日、ある地主さんから突然電話がかかってきた。

「先生のいう『みんなが気分よう住める長田』いうんを考えたったら、ミルクホールを思いついたんですが…」

「入り口に白い暖簾、ガラスケースの中に羊羹を挟んだロールケーキと醤油せんべい。壁には蜜豆・ぜんざい・ミルクコーヒーと品書きがある。アレかいな？」

「ハア。今の高齢者が若い頃に、長田によくあった喫茶店ですワ。ほんで現代長屋を作れんか思ひまして、アイデアおまへんか。私は一瞬、絶句した後「おもしろいなア」と答えた。

⇒ありあり感、同情、生活

近代神戸の形成期には、瀬戸内や但馬・淡路・四国、九州や奄美・沖縄、朝鮮半島や台湾から労働者がやってきた。彼らは長屋の一つ屋根の下で、戸がつながったような生活をしてきた。民族や出身地の差別なく、お互いの言葉や味を楽しみながら生活してきた。住戸は狭く、共同便所・共同井戸であったが、長屋の子供を高齢者と地蔵さんが見守り、女性は安心して内職のミシンを踏んだ。勤め先の靴工場も、食材を買い求める市場も、風呂屋や町医者も、徒歩圏にあった。当時のミルクホールは、長屋住民の応接間であった。路地は子供の遊び場。たこ焼屋や串カツ屋・駄菓子屋も点在していた。

⇒歴史・記憶、生活

この下町で育てられたぼくらは 70～80 年代、老いた親を老朽化した長屋に残して、ニュータウンに逃げた。自動車でショッピングセンターに行ったり、プライバシーのある生活に憧れ、ローンでイチゴケーキのような庭付一戸建を買った。安全で緑豊かで工場の音もない。しかし何かを失ったのではと、薄々感じてはいた。震災はその答えを露骨に教えてくれた。家が全焼したのにガレキに埋まった地蔵さんを心配する人。郊外の仮設住宅でふれあい喫茶を運営する人。そして、長屋を復活したいという地主。

⇒内省、発見、生活

私は、人々の語りに耳を傾け、かつてあった下町の豊かさを発見し、人間がつながる町の再生に、民俗学を役立てたいと思うのである。

⇒聞く、志

4月8日、震災で倒壊した長田中央市場が再建オープンする。

震災直後、倒壊した市場の倉庫から食料をとり出し、河川沿いの公有地に大鍋を並べて、いち早く焚き出しをした。ガスも電気もないとき、温かい食べ物で避難所の人々をどれほど勇気づけたことか。

⇒発見、生活

その功績が認められ、一ヵ月後、その公有地で仮設店舗が営業再開した。53名の商人が7つの共同店舗を経営した。仮設市場では、惣菜やお好み焼き・たこ焼きといった飲食を中心に営業した。古来、河原は誰の所属でもない公界（くがい）の地であり、物と人が交流する市が臨時にできた。天秤棒振り売りをしていた商人が、「見世（見せる）棚」を出した。四のつく日の市が四日市というふうに、現在も市から発達した都市は多い。

⇒歴史、構造

ところが現代では、河原は建設省の所轄であり、水を流す以外に使用してはいけない。モノを通じた交流の場は無くなり、商品を買って消費するだけの時代となった。しかし、どんなに物を大量消費しても、豊かと思われない現代とは何なのか。

⇒問い

震災の揺れで消費原理にヒビが入った。河川沿いが、緊急時の焚き出しの場になり仮設市場が建った。仮設市場の飲食コーナーでは、被災者が苦しい思いを語りあった。河原は、食べ物を通じた交流の場となった。市場商人は団結し、仮設店舗を共同経営した。半年後、被災者が郊外の仮設住宅に移転しだすと、商人は郊外の仮設住宅まで惣菜、新鮮な野菜や魚を、中古の冷蔵庫で届けた。ときには、町医者薬まで託されていた。

⇒生活、構造

不便な仮設住宅では、市場の行商トラックが来て、パラパラと棚が並べられると、雪の中を多くの人が集まった。商品と市場の空気が棚に並べられ、人々はその空気に触れることで生き返った。

⇒生活、構造、命

皮肉ではあるが、一瞬、物が無くなった震災直後の日々や、市場の空気を求めた苦しい郊外仮設での日々、そのなかに生きる豊かさがあつたのかもしれない。

⇒発見

市場のオープニングには、郊外の仮設住宅から長田の災害公営住宅に戻った客が集まることだろう。消費物を買う市場ではなく人々が交流する市場、それが中央市場の命だ。

⇒志

だからこの商人はあえてスーパー方式をとらず小さな店舗の寄り集まりで再建した。長田中央らしい選択だ。新市場の名前は、ずばり「市場」。おめでとう。

⇒同情

3.4 住吉台くるくるバスを内省する

従来、交通などのインフラは国、または自治体が整備

し、国、および自治体が管理するものであった。しかし、高齢化や地域衰退を前にして、住民がインフラ設置に請願するのみならず、開設・運営に関わるようになってきた。コミュニティバスにおけるこうした住民協働の日本におけるさきがけが、住吉台くるくるバスであり、筆者はそれに関わった。ここでは、住吉台くるくるバスの活動を記録した「マイバスが走る「幸せの町」～神戸市住吉台くるくるバスのその後～」(森栗『月刊福祉』, 8月号, 2006年)を素材に分析する。

住吉台は神戸市の六甲山麓にある。市バスの最寄バス停から315段の階段を登らねばならない。高低差が大きくて自転車使いにくく、狭い急カーブ急坂に沿って、階段状の宅地が並ぶ。この住吉台に、昨年1月、長さ7m、14席の小さなバスが走り出した。すると、バス停で、まちなかで、そして「バスなか」(?)で、会話が自然にかわされるようになった。

⇒生活、発見

1970年代末、県営住宅が山麓に作られ、続いて、大阪湾のオーシャンビューを望む民間住宅地が開発された。急傾斜地に約4,000世帯が住む。高齢化率25%弱。神戸市が開発したわけではない住吉台には、公共施設はほとんどない。小学校もない。スーパーもない。外出はどうしてもクルマ、バイクに頼り勝ちとなり、住民相互のコミュニケーションも難しかった。むしろ、若い世帯には、そのほうがわずらわしくなかった。眺めの良いこの町の間人関係は希薄であり、そこを吹く緑風のごとく、住民は阪神間の乾いた快適ライフを楽しんでいた。必要があれば、クルマで市街地におりれば良いし、運動のために坂を駆け上がったのも楽しい思い出である。しかし、30年も経つと、高齢化が忍び寄る。交通が不便な地域には、若者は残りにくい。どうしても、高齢者夫婦、在宅独居高齢者が多くなる。

⇒生活、歴史

「バスが欲しい」。人々は、何度も何度も区役所をお願いした。そのたびに、「道が狭いので運行できません」の返事が返ってきた。高コストの市バスでは運行が難しいという問題もあったのかもしれない。そうこうするうちに、1995年、阪神大震災がおきた。被災した市街地の高齢者が、ドッと住吉台県営住宅に入居してきた。「バスが欲しい」。この声は、高齢者の命をかけた悲痛な叫び声になっていた。

⇒発見

「もう、待てない」「役所はアテにできん」

先鋭化した住民が、地元のNPOを突き動かし、全国都市再生モデルとして、小型バスの有償実証実験がおこなわれた。2004年2月末から3月、1ヶ月余りだけ、1時間に1本のバスが走った。「みんなで乗ったら、本運行になるかもしれへん？」と人々は、毎日乗った。自動車を持っている人も乗った。住吉川の遊歩道を下流まで散歩して、わざわざバスで戻ってくる人もあらわれた。実証実験の最後、乗客はうなぎのぼりに増え、最終バスは悲鳴のよ

うな声で終わった。「これで終わりなの…」。

⇒同情、ありあり感

翌4月1日、何事もなかったかのごとく、またバスのない静かな町が再現した。しかし、住民の脳裏には、まだバスが走っていた。人々は黙っておれなかった。交通市民会議を立ち上げ、行政、バス事業者も加わり、どうしたらバスの本格運行ができるのかを議論した。(略)

⇒対話

2005年1月23日、こんな小さなバスの開通を、何だか新幹線開通のような気分で皆が祝った。手作りの「くるくるバス開通おめでとう」の文字がかわいい。人々は、歓喜にむせた。

⇒同情

「これで、この町に孫子の代まで住みつづける」

「この住み慣れた我が家を、終の棲家にできる」

⇒生活、同情、命

人々の喜びは、乗降客数を増加させた。当初、マーケティングでは、平均500人/日と言われた乗降客は、月ごとに上昇し、700、800…。今や1,000人を越える日もある。クルマで移動するより、リラックスして、皆とお話ししながら買い物に出かけるほうが楽しいと住民は考え出した。こうして町を通過するクルマの数がめっきり減り、出歩く高齢者が増えた。みな、神戸市の「敬老バス（高齢福祉無料交通バス）」が使えないくるくるバスにニコニコと乗る。(略)

⇒発見、生活

住民は、開通後の2005年6月からは、自治会ごとに代表を出して、くるくるバスを守る会を運営しだした。「くるくるバス通信」を発行し、全戸に配布してきた。くるくるバスは、住民の生活の一部になっていた。昼にお買い物に出た人が、夕方、駅で待つハズバントに呼び出され、久しぶりに夫婦でほろ酔い気分でバスに乗って帰っていったという噂を聞いた。そのうち、見かけない人がバスに乗る。どうもお孫さんや親戚がやってくるようになったという。「バス訪問」だと路上駐車を気にしないでよい。これも「バスばた会議」での噂話。(略)

⇒対話、生活、聞く

3.5 大阪市こどもの居場所づくりを内省する

大阪市は、昭和初期、60年代に近代商工業で栄えたが、近年、産業の衰退とともに、失業率全国2位、生活保護率全国1位、離婚率全国1位（平成24年〔以下Hと略す〕総務省調べ）、児童虐待も18歳以下1000人あたり全国平均が4.48件に対して9.98と第1位である（H26）。そこで、大阪市子ども青少年局ではH28より「地域における子どもの居場所事業」を実施している。そのうち、筆者が関わった2区の概要（筆者報告、未発表、大阪市子ども青少年局内部資料）の一部を紹介し分析する。

・淀川区

淀川区は、淀川下流の神崎川、新淀川に囲まれ、大阪駅、梅田駅から、国鉄、阪急、地下鉄御堂筋線が北に延び

た大阪市北辺にあり、中小工場とその労働者の生活利便施設、十三遊興街の裏手の古い住居地域が立地する。近年、工場跡に大型マンションが立地するようになった。

H17年、淀川区が子どもの居場所づくり事業に応募した。それに先立ち7月、筆者が講演した。10月、筆者が区役所、社協、まちづくりセンターなどとともに、3日間、12の地域活動協議会、NPO、おやこ劇場、こども会、こども育成プラザなどを巡り、現場担当にヒアリングした。11月、その成果をもとに、講演会とワークショップを実施し、子どもの居場所づくり活動を呼びかけた。冬休み、それに呼応した新東三国小学校に学生を派遣し、地域、学校、外部の大学連携のモデルを作り、これを、区長、区役所が現地小学校で見守った。こうしたなか子どもの居場所が地域問題として意識され、淀川区各地でこども食堂や宿題カフェが10ヶ所以上、次々と発足した。

⇒現場対話、問い

H29年、区社協では「子どもの居場所づくり」をテーマとし、10/18に、多様な活動の報告会を実施することとし筆者がとりまとめることとなった。それに先立ち、7/1 三津屋地区（阪急神崎川駅近く）で筆者が講演し後、通学路安全を議論し、住友不動産マンション700戸によりびかけることとした。

⇒聞く、対話

地域活動協議会会長によれば「三津屋は町工場など職員の町であり多様な人の出入りが普通で、提案した者が足場などを勝手に組んで祭りなどをしてきた」という。職員の町の伝統がこの柔軟性を支えている。

⇒歴史、発見、志

・宗右衛門町風俗紹介所 A さん

大阪ミナミの都心、道具屋筋看板屋の生まれ、後、日本橋に移動。歓楽街である宗右衛門町を精華小学校への通学路としていた。東京で飲食業を10年してきたが、32歳で実家に戻った。子が日本橋小学校に通いPTA会長となり、地域やPTAのすばらしさを学んだ。そうすると精華小学校が廃校になったことが悔しくなってきた。下でラーメン、上で住居。そんな生活をしたきた親たちが、「ラーメンなんかしんどいだけや」「勉強せい」と言ひだし、勉強できた子どもは大阪には戻ってこなかった。親たちはビルを売ったり貸したりしだした。土地が高いからそれだけで働かなくても食べていける。こんな状態だと、一時的に儲ける業態が進出し、地域が荒れた。私は「自分が儲けても、地域を守れなかったらアカンのやないか」と思ってきた。

⇒歴史、発見、公共、ありあり感

その頃、看板屋をたたみ、義理兄から弁当屋を引き継いだ。ちょうどキャッチセールスが禁止され、暴力団が活動できなくなり、Aが無料案内所も経営するようになった。こうなると働き手を探さないかん。

この紹介所に来る若者は、男はやんちゃして刑務所を出てきた者もいる。女は妊娠している娘（こ）もい

た。「家ない金ない携帯ない、ついでに夢希望ない」なかで、妊娠した女性も北は青森、南は福岡から流れてきた。今、このビルの7階に、9部屋あり、女性2人、男性6人を保護している。もともと個室ヘルスだったのでシャワー付き個室だ。しかも弁当屋だから食べるものはある。とりあえず、居てもらったが仕事が必要なので、風俗案内所を5つに増やし、女性は知り合いの怪しくない店を紹介したが、その先どうなるか心配だった。そこで自分で飲み放題スナック2軒を経営し、妊婦でも軽く働けるようにした。区役所の支援制度も紹介している。(略)(こうして、民間で虐待を防いでいる)。

⇒公共、生活、命、志

3.6 民俗学的まちづくりなどに対する内省のまとめ

筆者の都市民俗学から阪神大震災復興まちづくり、住吉台くるくるバス、大阪市子どもの居場所づくりという個人的な経験をふりかえってみると、①柳田國男の内省に起因し、同情をもって、人々の生活の「意味」を発見しようとしてきたことがわかる。②各地を歩き見て、人々の声を聞き、歴史的経験をもとに理解し、理解したことをありあり感ある表現をしようとしてきた。阪神大震災復興まちづくりでは、筆者は民俗と復興市民の暮らしを類構造として生活理解を試みたが、民俗的知識よりも、徐々に③命や公共に価値をみて記述するようになった。聞く、問いについては、④コミュニケーションデザインというよりも、筆者には民俗学的態度として、聞く、問う、同情、発見があったと感じている。表2に以上を整理し、筆者が自己発見した方法に影響を与えたと思われる研究者名を「理論提案者」として付記した。

4. 結論

筆者はこれまで、まちづくりに対するエピソード記述を、現象学的方法で分析し、内省と同情、「問う」「聞く」「待つ」「発見」「納得」「公共」「ありあり感、(力動感)」という評価項目を「仮説」し、さらには「命」や「生活」に関わる記述がより了解性を高めると指摘した(森栗

2017)。

今回、自らのまちづくり研究の経験を内省し、内省、同情、聞く、問い、対話、歴史経験、ありあり感ある記述、類構造、発見として理解を試みた。最近の研究では徐々に命、さらには公共に価値をみて理解するようになってきた。

民俗学的まちづくりの方法は、個々の思い aspiration や生活の内省、集団、地域の内省を共有化する(わかちあう)ものであり、同情や問い、歴史経験の考慮、類構造のみならず、命や公共心を問うことで、より了解性の高い「仮説」を提示するものである。

本論では、地域の暮らし方、aspiration を定性的に発見する民俗学的まちづくりを「仮説」し、対話による価値発見のまちづくりを「共創 co-creation まちづくり」とよぶことを提案する。

民俗学的まちづくりを「仮説」して提案する「共創 co-creation まちづくり」は、都市計画専門家が、都市計画的定理に基づく計画事業を、定量的に正当化して地域に押しつけ、一方的に説得する「まちづくり事業」とは真逆であり、多様なセクターによる共創、いわば「まち育て」をめざすものである。

本論は地域に根ざした価値発見型のまち育て、人育ての民俗学的まちづくりの方法「仮説」であるが、本「仮説」こそ、共創の方法論であると考え、共創まちづくりとよぶことを提案する。

注

(1) 菅野は乳児が鳩を指さして、「ポッポ」と最初に発話する場合の知覚を推論し、

① 幼児が鳩の一般定理を前提として、眼前の個別的なるものを「ポッポ」と呼ぶ演繹法を使ったわけではない。

② 幼児が個別の鳩を多数観察し、眼前の個別的なるものを「ポッポ」と呼ぶ帰納法を使ったわけではない。とし、

③ 多様な鳩を見た経験をアブダクション(遡及推論)した結果、眼前の個別的なるものを「ポッポ」と仮

表2：個人的なまちづくり経験と方法

方法	経験	①内省	②歩く、見る、聞く	③人、暮らし、命	④コミュニケーションデザイン
1990-	都市民俗学	内省、故郷			
1995～2000	阪神大震災復興まちづくり	同情、発見、志	ありあり感	歴史、生活、構造	聞く、問い
2003～2005	住吉台くるくるバス	同情、発見	ありあり感	歴史、生活、命	聞く、対話
2016～現在	大阪市子どもの居場所づくり	発見	ありあり感	歴史、公共、生活、命	聞く、問い、対話
理論提案者		柳田國男	宮本常一	延藤安弘	鷺田清一
方法の 具体的展開		内省、故郷、「仮説」推論法、ティンカリング	親しいと思う目尊いと思う心	「だったらエーナア」 aspiration 「何のために生きてるんや」=志⇒物語	聞く、問う、待つ 臨機応変に動く

設した。

と、3つの可能性を示し、現実には通常の幼児が鳩の定義を持つはずがなく、また、幼児が多様な鳩を観察し類推するわけがなく、幼児の経験からの遡及推論以外にありえないと、述べている(菅野, 2015, p.100)。理念化とはこのような作業であり、それは「仮設構成」と共通の基本構造を有している(菅野, 2015, p.108)と、通常の仮説検証以外の「仮説」があることを述べている。

※菅野は科学実証の仮説とは異なる論理学として「仮設」と表記している。これは筆者の「仮説」に近いものとするが、表記上の混乱を生じるので、本論の本文では、仮説と「仮説」(菅野の「仮設」にあたる)との区別のみにとどめた。

- (2) 論理実証による科学的方法論は方法的正当化という課題を生じ、ポパーの反証可能性による仮説吟味が哲学的立場として形成された。仮説は仮説として反証され放棄されるためにあるとされた(永井均他, 2002, p.156)。
- (3) 自然科学では通常仮説が使われる。しかし、近代日本の初期の論理学ではより論理面に重きをおいた「仮設」が使われることがあった。現代でも村上陽一郎「新しい科学論 - 事実は理論をたおせるか」では、「仮設」が使われている(参考: <https://oshiete.goo.ne.jp/qa/1878506.html>)。菅野(菅野, 2015, p.100, 108)も論理面を重視して、「仮設」と表現しているものと思われる。本論での「仮説」は、この意味で「仮設」に近いが、本文上の混乱をさけるため「仮説」とのみ表記することとした。
- (4) 個人の経験の内省、およびその内省から他者の経験を類推する分析は、分析対象と分析者を分ける客観的(を前提とする)研究とは異なる方法である。
- (5) 「日本の民俗学が他の隣接科学と異なる方法とという特徴は、調査される人びとの信仰や感覚に、調査する事故のそれを同調させて共感する、先生(柳田國男)のいわゆる“同情”の論理ではなかろうかと考えます。その同情による主観的感覚を客体として考察の対象とする」と述べられている(千葉, 1978, p.146)。
- 以下に記した「付言」で述べるように、柳田國男の方法は、機能法と内省・同情によって民俗総合を了解しようとする方法とが、相矛盾する形で混在している。筆者は、柳田の「農村の民俗事象」を並べる帰納法に違和感をおぼえ、都市民俗学に傾倒する。阪神大震災でのまちづくり実践で、後からふりかえれば、筆者の非帰納法的態度が、一気に「内省・同情」の実践へと向かったものと思われる。
- (6) 人文科学では、間主観において厳密な共通認識は成立しないが、共通構造を取り出すことはできる(竹田, 2015, p.14)という意見がある。反省は現象学における本質的な方法の一つ(木田他編, 1994, p.390)であり、現象学的分析は自分の経験を「反省」することによってなされ、「間主観性(相互主観性)のなかにあ

る」反復的同一化総合として、構造を発見する(木田他編, 1994, pp.227-228)なかで、より了解性を高めることができるとした。ポパーにいたっては、確実なことは一切存在しないと、仮説が反証可能性を持つことこそ存在の意味であるとした。

- (7) 延藤安広は、共同居住としてのまちづくりにおいて、「何をめざして生きるんや」(延藤, 2001)、「こんなまちに住みたいなナ」(延藤, 2015)と、住民の志(aspiration)を問い続けてきた。筆者も、阪神大震災の活動をまとめた記録誌(自家版)を「こころざし」と命名した。阪神大震災において、ともに居住復興を求めて活動した延藤の影響であろう。
- (8) フッサールは、類型 *typus* と述べている。類的構造を探し出すという意味で、ここでは構造と表記する(木田他, 1994, pp.468-469)。
- (9) 森栗『都市人の発見』(森栗, 1993)など
- (10) 松山「「とうとい」と思う眼、「したい」と感じる眼」(松山, 2009)など。
- (11) 共創は大阪大学の産官学民の方向(OUビジョン2011)であるが、論理的説明がない。筆者は共創思想の発案は、現象学哲学者である鷺田清一元総長であると考えている。筆者は、震災復興のまちづくりシンポジウムに何度か鷺田とともに登壇した。筆者は、昨年、大阪大学共創機構に対話型エリアマネジメント研究を提案し、その理解と支援を得た。
- (12) 「まち育て」は、「国土交通省エリアマネジメントガイドライン」(国土交通省, 2017年)がめざす概念でもある。

付言：本論に付随した発見

筆者は、民俗学を基礎として内省的まちづくりを実践してきた。本論は、その実践経験を内省し、民俗学的まちづくりとして「仮説」提案した。内省による「仮説」は、発見の文脈として重要であることを指摘した。

ところが本論の考察の過程で、柳田國男の民俗学の核心に現象学があることを筆者は発見し(てしまっ)た。本論の核心に関わる発見であるので、本論に付言して報告する。

柳田國男が民俗学を確立するのは1935年以降である。教科書ともいえる『郷土生活の研究法』には「出来るだけ大量の正確な事実から帰納によって当然の結論を得、且これを認めることそれが科学である」(『郷土生活の研究法』『定本柳田國男』25巻, 1935, p.325)とあり、「民俗学の話」には「いやしくも、サイエンスと呼ばれようとする限りは、その方法—自然科学が成功してゐる方法によらなければならないのでせう」(『民俗学のはなし』『定本柳田國男』24巻, 1935, p.498)と述べている。昭和初期、近代自然科学全盛のなかで、当時の歴史科学が相手にもしないような生活知を扱う民俗学を、好事家の学ではなく科学として体系化しようという柳田の方法的戦略であったと岩本は指摘する(岩本, 1990, p.117)。

こうしたなか、「此学問で大切なのは実感だ」(折口信

夫「民俗研究の意義」、1935年（『折口信夫全集』16巻、1976、中公文庫、p.504）と主張する折口信夫に対して、柳田國男は実感の協調を戒めている（柳田國男、1954、「折口信夫追悼」『国学院雑誌』55巻1号）。このことは、後日、柳田が折口を破門したといわれている。

その一方で、柳田は「異常の洞察力を具えた折口君等の推断は、往々にして後に的中を証明した」（『定本柳田國男』14巻、1932、「食物と心臓」、p.229）と、逆の評価もしている。さらには出版されなかった2つの「民俗学教本案」（柳田為正、1987、pp.229-231）のためのカードを分析した岩本通弥は、柳田の本旨は実証主義ではなく、「内省（＝同情。心理学の内観 introspection と同義 [岩本、1990、p.125]）」「了解 Verstehen」「綜合 Synthesis」であると指摘している（岩本、1990）。内省（反省）、了解、綜合は、現象学の分析概念と一致している。

内省は心理学の内観（introspection）と同様であり、柳田は「同情」と表現している。柳田の高弟である千葉徳爾は「（民俗学の）特徴は・・・同情の論理ではなかろうかと考えます。その同情による主体的感覚を客体として考察の対象とする」（千葉、1978、p.146）と評している。

柳田は「私たちのいふ三部の資料、すなわち眼で視、耳で聴き、心で感ずるものが結び合って、始めて人間の情意の作用を諒解し得るのが寧ろ普通である」（1932年『定本』14巻、p.227）と、心は諒解（了解と同義）すべきものと述べる。ディルタイも「自然に対してわれわれは説明するが心的生活は理解する」（ディルタイ、1973）という。

岩本は、「個別は実証主義による説明科学でよいが、綜合については仮説をたてて理解する科学であると指摘し、「綜観」は仮説の構成と提示、すなわち「発見の文脈」における方法であると指摘し…パターンの知覚」と指摘している（岩本、1990、p.122）。岩本はこの「パターン」は現象学的方法である類型（構造）（木田他、1994、pp.468-469）である。

さらに、フッサールは間主観的構成について第一段階では自我と他者という位置づけにおき、第二段階では故郷世界と異郷世界との比較においている（木田他『現象学事典』1994、p.153）。森栗が『都市人の心』で編じた都市民俗学の故郷論は、フッサールの第二段階に関する問題意識とシンクロする。

1920年頃、フッサールは生の哲学への関心から生活世界 life-world に関心をもった。フッサールは1925年、『現象学的心理学』に「すべての思想や精神的活動から生じるその他すべての理念的形成体の最終的基盤は経験世界（生活世界の中に存在する）」と述べている。1927年には『現象学年報』誌上に発表されたフッサールの議論が話題になっていた（木田他『現象学事典』1994、pp.259-262）。同年、同雑誌にハイデッガーの『存在と時間』が掲載された。その1925～27年、柳田國男は国際連盟の委任統治委員としてフランス語圏のジュネーブに滞在していた。しかし柳田國男の読書日記にはフッサールを読んだ記述がない。人類学者マリノフスキーや社会学者デュルケームの影響を指摘する意見はあるが（川田、1996）、柳田に現象

学の影響を説く議論はない。しかしフランス語を解し、現象学全盛の同時期にフランス語圏のジュネーブに滞在した博識の柳田國男が、生活世界を構造対比し類型を見出し、一定の「仮説」を提出する現象学に関心を寄せる機会は、少なくなかったと思われる。

しかし、昭和初期、科学実証主義を丸呑みした日本では、柳田國男は「機能法、自然科学が成功してあるサイエンス」として、1934年に日本民俗学の実証的方法を記述した『民間伝承論』を刊行し、日本民俗学会の起源となった木曜会をはじめた。柳田は現象学的知をカードの奥深くに封印したのだ。その一方で、柳田國男は、『食物と心臓』などの著書や、戦後、密かに発刊されなかった教科書に「実感」や「内省（同情）」「了解（諒解）」「綜合（綜合）」という現象学の言葉をちりばめた。

実は、「自然科学が成功してある帰納法による『実験の史学』」を実践したのは、戦後、東京教育大学文学部史学方法論講座を改組し、民俗学を大学に受け入れたのは東京教育大学文学部長和歌森太郎である。これに対して、筑波大学の地理学者として綜合を知りつつ、戦後、柳田のカードによる教科書執筆依頼を辞退したのが千葉徳爾であった。

結果、柳田國男は「日本民俗学の退廃を悲しむ」と最後の講演で、か細く言い残して死んだ（大塚、2017、p.16）。

引用文献

- 千葉徳爾（1978）. 民俗学のこころ. 弘文堂.
- ディルタイ, W. (1973). 久野昭訳. 解釈学の成立. 以文社.
- 延藤安広（2001）. 何をめざして生きるんや. プレジデント社.
- 延藤安広（2015）. こんなまちに住みたいナ. 晶文社.
- 船橋晴俊・壽福眞美編（2013）. 公共圏と熟議民主主義. 法政大学出版局.
- Greenhalgh, T. and Hurwitz, B. eds. (1998). *Narrative based medicine*. BMJ Books. (齊藤 清二他（監訳）(2001). ナラティブ・ベイスド・メディシン. 臨床における物語と対話. 金剛出版.)
- 医療教育情報センター（2004）. NBM (Narrative-based Medicine) —物語と対話による医療—. 新しい診療理念. バックナンバー (No. 015r; 2004/11/15)
- 岩本通弥（1990）. 柳田國男の「方法」について—綜観・内省・了解—. 国立歴史民俗博物館研究報告, No. 27, 113-135.
- 川端祐一郎・藤井聡（2014）. コミュニケーション形式としての物語に関する研究の系譜と公共政策におけるその活用可能性. 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol. 70, No. 5 (土木計画学研究・論文集第31巻), I_123-142.
- 川田稔（1996）. 柳田國男と日本の将来. 柳田國男・ジュネーブ以後. 三一書房.
- 木田元・村田純一・野家啓一・鷺田清一（編集）（1994）. 現象学事典. 弘文堂.
- 小池淳一（2015）. 都市民俗学はどこへいったのか. 国立

- 歴史民俗博物館研究報告, Vol. 199.
- 倉阪秀史 (2012). 政策・合意形成入門. 勁草書房.
- 松山巖 (2009). 「とうとい」と思う眼、「したい」と感じる眼. 『宮本常一が撮った昭和の情景』下巻. 毎日新聞社. 所収.
- 森栗茂一編著 (1993). 都市人の発見. 木耳社.
- 森栗茂一 (1998). 幸福の都市はありますか—震災神戸と都市民俗学—. 鹿砦社.
- 森栗茂一 (1999a). 随想:長屋の復興. 神戸新聞 (夕刊). 1999/1/22.
- 森栗茂一 (1999b). 随想—河原の市場の再建—. 神戸新聞 (夕刊). 1999/3/25.
- 森栗茂一 (2003). 河原町の歴史と都市民俗学. 明石書店.
- 森栗茂一・島田誠 (2004). 神戸—震災を越えてきた街ガイド—. 岩波書店.
- 森栗茂一 (2006). マイバスが走る「幸せの町」—神戸市住吉台くるくるバスのその後—. 月刊福祉, 8月号.
- 森栗茂一・板倉信一郎 (2015). 忘れられた衆議—日本の合意形成のこれまでとこれから—. 第51回土木計画学研究・講演集.
- 森栗茂一 (2016). オールドニュータウンの持続を担保するくるくるバス活動の位置づけについて. 実践政策学, Vol. 2, No. 2, 161-168.
- 森栗茂一 (2017). 実践政策学のためのエピソード記述の方法序論. 実践政策学, Vol. 3, No. 1, 53-60.
- 永井均他編 (2002). 事典哲学の木. 講談社.
- 中原淳・金井壽宏 (2009). リフレクティブマネジャー. 光文社.
- 中山健夫 (2008). 健康・医療の情報を読み解く—健康情報学への招待—.
- ナトリー, S. M.・ウォルター, I.・デイヴィス, H. T. O. (2015). 惣脇宏他訳. 研究活用の政策学. 明石書店.
- 西研 (2015). プロローグ. 小林・西編. 人間科学におけるエヴィデンスとは何か. 新曜社.
- 西研 (2015). 人間科学と本質観取. 小林・西編. 人間科学におけるエヴィデンスとは何か. 新曜社.
- 貫成人 (2003). 経験の構造—フッサー現象学の全体像—. 勁草書房.
- 大塚英志 (2017). 殺生と戦争の民俗学—柳田國男と千葉徳爾—. 角川書店.
- ポパー, K. R. (1980). 藤本・石垣・森訳. 推理と反駁. 法政大学出版会.
- 菅豊 (2012). 公共民俗学の可能性民俗学の可能性を拓く. 公共民俗学の可能性. 青弓社.
- 菅野盾樹 (2015). 示しの記号—再帰的構造と機能の存在論のために—. 産業図書.
- 竹田青嗣 (2015). 人文科学の本質的展開. 小林・西編. 人間科学におけるエヴィデンスとは何か. 新曜社.
- 山竹伸二 (2015). 質的研究における現象学の可能性. 小林・西編. 人間科学におけるエヴィデンスとは何か. 新曜社.
- 柳田為正・千葉徳爾・藤井隆至編 (1987). 柳田國男談話稿. 法政大学出版会.

- 米盛裕二 (2007). アブダクション. 勁草書房.
- ウリクト, G. H. (1984). 丸山・木岡訳. 説明と理解. 産業図書.

Abstract

The purpose of this paper is to set up a hypothesis on how to develop an ethnographic community. In this paper, the author reflects on his more than twenty years of experience of research on ethnographic as well as interactive community development, and he carries out abductive reasoning on its methods. In the process of examining his experiences of urban-ethnographic community development, of the Great Hanshin Earthquake Reconstruction and Town Planning, of resident-collaborative traffic community development, and of Osaka-city developments of the living-environment for children, the author once more recognizes that he sympathized with the activities of local residents, and reflects on ways of life and searches to find life values. Today, people's lives and public concepts are important in ethnographic community development. Thus the following hypothesis is presented. The methods for ethnographic community development aim to share individual aspirations and the appreciation of lives, groups, and communities. Furthermore, through dialogue questions are found concerning sympathy and ways of life, local history, and life and public spirit. As a result, the lives of local people and their aspirations will be discovered and a very clear and understandable hypothesis will be presented. This paper will establish such an ethnographic community temporarily, and it will be called a community development of co-creation.

(受稿:2018年4月6日 受理:2018年6月25日)